農業総合研究センター かわら版

第149号 令和7年12月16日発行

山形県農業総合研究センター　研究企画部
〒990-2372 山形市みのりが丘6060-27
電話：023-647-3505
＊研究企画部では、記事に関する皆様からのご意見ご要望をお待ちしております。

〈主な内容〉

■ 令和７年度「山形県農業技術振興会」顕彰　・・・1ページ
■ 令和７年度「農業技術功労者表彰」の受賞について　・・・3ページ
■ 園芸学会東北支部研究発表賞を受賞！　・・・4ページ
■ 研究紹介
・畜産研究所の研究紹介　・・・5ページ
・養豚研究所の研究紹介　・・・6ページ
■ アグリビジネス創出フェア2025で研究成果をPR　・・・7ページ
■ 若手研究員からの一言メッセージ　・・・7ページ

令和７年度「山形県農業技術振興会」顕彰

山形県農業技術振興会（須藤佐藏会長）は、本県農業技術系職員の資質や士気の向上を目的に、平成21年設立され、毎年、本県農業の発展に優れた業績を上げた職員を顕彰しています。

17回目となる今年は、以下の３団体が「農業技術振興賞」を受賞し、11月25日、村山総合支庁西村山地域振興局で表彰式と事例発表が行われました。業績概要は以下のとおりです。

○ソバ新品種「山形ＢＷ５号」の育成

土地利用型作物部そば品種開発チーム　　代表　錦 秀斗　氏

山形県はソバ作付面積が全国第２位だが、単収アップが課題となっていた。農業総合研究センターでは平成20年から品種開発に着手し、「でわかおり」と「常陸(ひたち)秋そば」を交配して「山形BW５号」を育成。研究員と研究技能員が協力し、隔離小型ハウスの自作やサシバ工放任受粉法の導入など、工夫と試行錯誤を重ねて本県独自の育種手法を確立した点が高く評価された。



新品種は既存品種より収量性・耐倒伏性に優れ、製粉歩留りが高く、そば切りの色調・食味も優れている。そのようなこともあって、令和６年時点で３地域146haまで作付は拡大し、県産ソバの生産量向上に寄与している。

鶴岡市宝谷地区では「でわ宝（たから）」として商標登録し、地域ブランド化を推進しており、「そば王国やまがた」の新たな魅力として期待される。

○最上主要野菜の次世代リーダー育成

次世代リーダー育成プロジェクトチーム　　代表　島貫 源基　氏
（代理受領　藤島 弘行　氏）

最上総合支庁農業技術普及課管内では、高齢化と後継者不足に直面する野菜産地の維持・発展が急務だったことから、各地域・品目ごとに次世代リーダーを育成し、産地の持続的発展の基盤を築いた取組みが、モデル的な普及活動に値するとして高く評価された。

同チームは平成25年から、ねぎの若手生産者に呼びかけ勉強会を実施。JAや地域を超えた研究会が誕生し、その仕掛けは、にら、トマト、アスパラガスへと、他の品目へ次々と展開し研究会を設立させた。

特に注目すべきは、技術の高い若手生産者を「生産者アドバイザー」に任命し、栽培経験が浅い生産者への指導体制を構築した点である。また、品目の枠を超えた経営研修会と交流会を企画し、地域全体の横のつながりを強化した。地道な担い手育成は、長期的な産地の維持・発展に大いに期待が持てる。



○置賜地域で進めるアルストロメリア産地の技術支援

置賜地域アルストロメリア産地技術支援グループ　　代表　齋藤 梓　氏

山形県のアルストロメリア生産は全国第３位（産出額約６億円）を誇り、特に置賜地域が主要産地となっている。一方で、アルストロメリアは種苗費や栽培コストが嵩む上、近年の燃油高騰、資材価格の高止まり、更には猛暑による生産性が低下していたことから、当該グループは、生産コスト削減と品質向上に向けた革新的技術を開発・普及させ、全国トップレベル品質の産地に押し上げたことが高く評価された。

まず、平成15年から約340品種・系統を調査。収益性、耐暑性において優位性の高い品種を選定し、生産者に情報提供。また、夕方から早朝にかけた暖房温度管理法を検討し、日没前後の昇温処理により、燃油消費量を約13%削減。さらに、夏期高温時の対策として、水道水圧利用の簡易ミストシステムによる飽差管理で、品質・収量向上を実現させた。



石黒 亮　氏「令和7年度農業技術功労者表彰」を受賞



東北農林専門職大学の石黒亮准教授が、令和７年度（第81回）農業技術功労者表彰の農林水産技術会議会長賞を受賞しました。本表彰は、農業技術の研究や普及指導で顕著な功績があった個人に贈られ、今年度は全国で５名が受賞しました。

石黒氏は、長年果樹の品種開発に従事し、「やまがた紅王」を含むさくらんぼ優良品種６品種を育成し、産地振興に貢献しました。

特に、未解明だった主要形質の遺伝様式を解明し、科学的・実践的なおうとう育種技術を確立したことで育種効率が飛躍的に向上しました。

また、早生から晩生まで収穫期の異なる6品種から成る「紅シリーズ」を育成。これにより、収穫期が分散され、産地の労働負荷と経済的リスクが軽減されました。

中でも「紅秀峰」は「佐藤錦」に続く主力品種となっており、「やまがた紅王」は、大玉、硬肉であることから、労働力不足や気候変動に対応可能なおうとう産業の持続的発展を牽引する品種として期待が高まっています。

「紅シリーズ」の育成は、気候リスク対応、労働力不足解消、結実安定など多角的な課題解決に貢献し、農業現場のニーズに応えています。

また、収穫期の長期化による観光客誘致や産直販売増加など、地域経済への波及効果も高く評価されました。




表彰状

石黒 亮 殿

おうとう優良品種群紅シリーズの育成による産地振興

あなたは右の業績において農業技術の研究普及に寄与するところ大なるものがありました

よってここに令和七年度農業技術功労者として表彰します

令和七年十二月五日

農林水産技術会議会長 本川一善

園芸学会東北支部研究発表賞を受賞！



令和７年８月26日に開催された園芸学会東北支部大会で、園芸農業研究所バイオ育種部　井上雅貴専門研究員の発表が、園芸学会東北支部研究発表賞を受賞しました。

本賞は、研究発表課題のうち、新規性・波及性・発表技術が特に優秀とされるものに授与されるもので、対象となった発表は「夏季高温翌年におけるオウトウ品種・系統の多雌ずい花率」（受賞者：井上雅貴・多田史人・髙山宥美・安達栄介）です。

発表では、オウトウにおける「双子果」が発生しにくい品種開発へのアプローチとして、過去４回の多雌ずい花多発生年における180品種・系統ごとの発生比率傾向と、後代で発生率が高い品種・系統がみられること等を報告しました。



【研究紹介】～畜産研究所　家畜改良部～
県産種雄牛「七福久（しちふくひさ）」号が
デビュー！！



畜産研究所では、黒毛和種の育種改良と「総称山形牛」のブランド力向上のため、県産種雄牛の作出に取り組んでいます。

黒毛和種には大きく３つの系統があり、肉質と脂肪質の良い“田尻系”、増体に優れ肉量が多い“気高系”、肉質と増体を兼備する“藤良系”とそれぞれ特徴的な遺伝形質を持っています。このたび紹介する「七福久」号は、肉質と脂肪質の良い田尻系種雄牛として造成され、令和７年11月にデビューしました。

本牛は、脂肪交雑の推定育種価並びに脂肪の「口どけ」の良さに関連するＭＵＦＡ（一価不飽和脂肪酸）割合のゲノミック育種価が優秀な、金山町の繁殖雌牛「ふくひさの２」号と、全国的に産肉能力の評価が高い田尻系種雄牛「美津照重」との交配により作出されました。父「美津照重」号と母「ふくひさの２」号の優れた脂肪交雑能力を受け継ぎ、現場後代検定成績では、本県歴代種雄牛最高成績のBMS№10.1、上物率100%を記録しました。また、ＭＵＦＡ割合の遺伝的能力も優れており、第13回全国和牛能力共進会（令和９年８月開催）の第７区（脂肪の質評価群）の種雄牛となっています。

「総称山形牛」は深い味わいとまろやかな脂質が魅力です。県内一円の繁殖農家・一貫農家の皆様から多く利用していただくことで、山形生まれ・山形育ちの「総称山形牛」の更なる生産拡大とブランド力の向上が期待されます。



【研究紹介】～養豚研究所～
繁殖母豚の省力・低コストなクール技術の開発

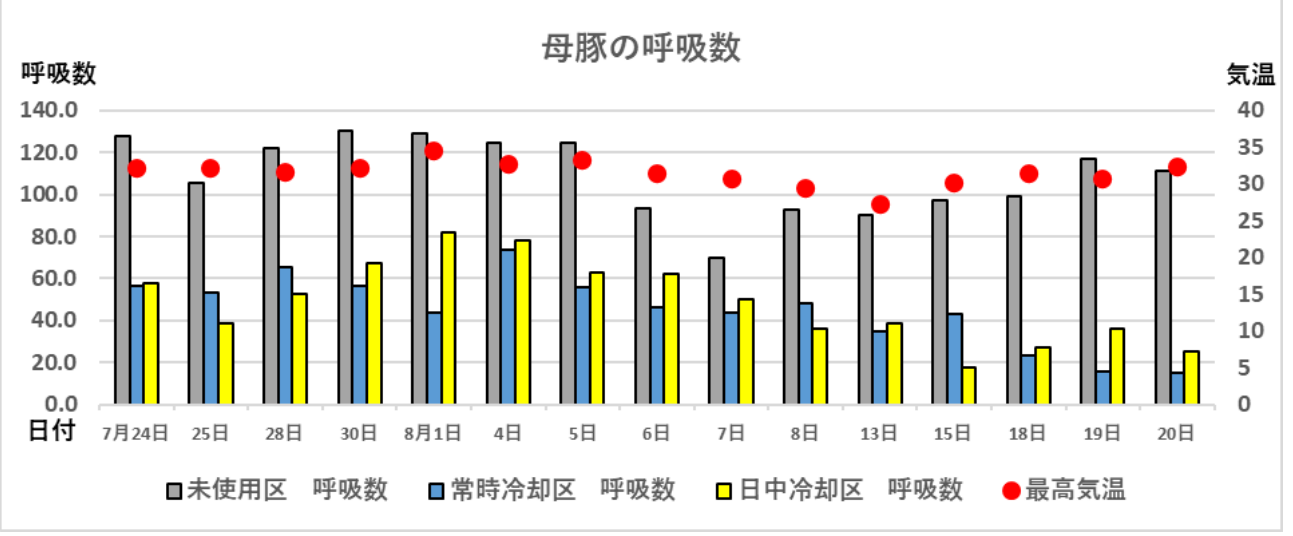
当研究所では、「第５次農林水産業元気創造戦略」に基づき、スマート技術等の新たな技術や気候変動に対応した技術、生産性向上に資する技術を活用した研究開発等を行っています。今回は、生産性に悪影響を及ぼしている繁殖母豚への暑熱対策を紹介します。

昨年度から取り組む本課題では、県工業技術センター庄内試験場と協力し、豚用飲水器を改造し母豚の顔などを冷却できる装置を数種類試作しています。ほかにも、ミストシャワー噴霧装置を取り付けた扇風機を使って冷却効果の検証も行っています。

昨年度の検証では、試作した飲水器の冷却機能が常時作動するタイプであったため、夜間等で気温が上がらない時間帯は母豚や子豚が冷えすぎてしまう可能性があるという課題が残りました。そのため、今年度はこれまでの試作飲水器に加え、冷却機能を止めることができる改良型飲水器を試作し、両試作飲水器の使用区及び未使用区で母豚の呼吸数を比較しました。

その結果、どちらの試作飲水器区の母豚とも、未使用区の母豚に比べ呼吸数が1/2～1/3程度まで大きく減少する傾向がみられました。

なお、今年度は常時冷却区と日中のみの冷却区で母豚の呼吸数に大きな差が生じなかったことから、最終年度の来年も引き続き検証を進め、県工業技術センター庄内試験場と連携して飲水器の機能や構造を決定し、製品化を目指す予定です。



アグリビジネス創出フェア2025で研究成果をPR





農林水産・食品分野の最新技術が集まる一大イベント「アグリビジネス創出フェア2025」（農林水産省主催）が、東京ビッグサイトにおいて11月26日から28日の3日間開催されました。

当センターでは27日に令和7年度にデビューしたなす新品種「山形N1号」を出展しました。会場では山形県の伝統野菜である「薄皮丸なす」と比較して、果実の品質が良く、高収量などの特徴をPRしました。また、他の当県育成品種の特性や、研究内容についても紹介しました。

ブースにお立ち寄りいただいた方には、「山形N1号」の漬物試作品を配布し、アンケートにご協力いただきました。「食感や味が素晴らしく、とても美味しかった」、「山形県オリジナルの品種という点に魅力を感じた」など、ご好評をいただきました。

今回のフェアを機に、「山形N1号」の魅力が多くの方々に届くことを期待し、引き続き情報発信してまいります。

若手研究員からの一言メッセージ



園芸農業研究所 野菜花き部
研究員　井出　大介

令和７年度に新規採用職員として園芸農業研究所野菜花き部に配属されました。専門は「花き」で、現在は研究課題の「アルストロメリアの複合環境制御と地中加温を組み合わせた高効率生産技術の開発」を担当しています。

これまでに先輩方の指導を受けながら、自身の研究課題に取り組むとともに、りんどう、ばら、ストック、「啓翁桜」などの栽培を学んでいます。

９月には、先進農家研修として花き生産者のもとで、トルコぎきょうの出荷調整やストックの定植作業を行いました。まだ暑くてハウス内での作業は大変でしたが、生産者と一緒に作業でき、考え方や作業体系を知る貴重な経験となりました。

生産者が抱える課題を常に意識しながら、より実用性の高い技術を提案できる職員を目指して、知識と技術の習得に励んでまいります。これから、アルストロメリアの地中加温の効果を調査する重要な時期になります。生産者に役立つ技術の確立を目指して、データの収集や分析に取り組んでいきます。